

【研究動向】

女性医師をめぐるキャリア研究の現状と課題

佐伯 知子

Trends of Career Studies of Women Physicians

SAEKI, Tomoko

本稿は、医療系の論文検索サイトである医学中央雑誌（以下、医中誌）の検索結果から、女性医師におけるキャリア研究の動向を概観しようとするものである。

医中誌は、特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会による国内医学論文情報の検索サービスであり、現在、全国の医学・歯学・看護学系大学のほとんどで導入されているものである。国内発行の、医学・歯学・薬学・看護学・獣医学などの関連分野における定期刊行物（学協会誌・研究会誌、業界誌、商業誌、大学・研究所・病院・学術団体などの紀要、研究報告）のべ約 6,000 誌から収録した、約 1,000 万件の論文情報（原著論文、症例報告、総説、解説、学会抄録・会議録など）を網羅している¹⁾。こうした実績をふまえ本稿では、医中誌の検索結果から、日本における女性医師のキャリア研究動向をとらえることとした。

1. 女性医師をめぐるキャリア研究の量的動向

まず、女性医師におけるキャリア研究の量的動向についてみていきたい。

量的動向をとらえる手続きとしては第一に、「キャリア」のワードでシソーラス検索を行った。その結果、本稿でいう職業人としての生き方を指す（医学分野でいう保菌者などの意味を除いた）キャリア研究は、「職歴の移動」「スタッフ開発」の2つの関連カテゴリーに整理されており、12,781 件であった。これらをさらに、「医師」のワードで絞ると、1,278 件、さらに「女性」あるいは「男性」のワードで絞ると、それぞれ 204 件、17 件であった。男性医師というキーワードを据えたキャリア研究が圧倒的に少ない結果となっているが、これについては、「男性」というキーワードをあえて入れることの必要性・重要性が認識されていないことを示しているように思われる。医師文化が男性中心のものであることをあらためて考えさせられる結果といえよう。なお、男性医師のキャリア研究として出てきた 17 件の具体的内容をみても、ほとんどが女性医師をめぐる議論を展開する過程で男性医師に言及する程度のものであった。

次に、検索結果を年代別にみると、医師のキャリア研究は 2000 年代後半より活発に行われるようになっており、ここ数年でますます盛んになっていることがはっきりとわかる（表 1）。これについては、2004 年の「新医師臨床研修制度」の導入によって臨床研修が必須となり、各自が研修先・就職先を選ぶ制度になったことで、医師のキャリアに関

する関心が高まったものと推測される。

表 1 医中誌における論文検索結果（検索日：2014 年 12 月 18 日）
（単位：件）

年	検索ワード		
	職歴の移動× スタッフ開発× 医師	職歴の移動× スタッフ開発× 医師×女性	職歴の移動× スタッフ開発× 医師×男性
～1989 年	0	0	0
1990～1994 年	0	0	0
1995～1999 年	0	0	0
2000～2004 年	102	3	0
2005～2009 年	512	49	4
2010 年～	664	152	13
合計	1,278	204	17

2. 女性医師をめぐるキャリア研究の質的動向

ここでは、前章で検索した女性医師をめぐるキャリア研究について、（1）現状調査・課題分析、（2）事例紹介の 2 つに分け、内容の全体的傾向および注目される論点をみていきたい。

（1）現状調査・課題分析

①卒後（専門科別）

女性医師のキャリア研究においてまず特徴的だったのが、専門科別の考察が多かったことである。医師は専門科により仕事の内容や形態が大きく異なるため、キャリアを考える際には特に、どの専門科の問題かが極めて重要な要素となっているのである。

この研究成果の多くは、各学会における発表の抄録であった。まずは一定数の成果が確認されたリハビリテーション科と外科の 2 つに注目しておきたい。リハビリテーション科においては、浅見豊子「女性がリハビリテーション科医になるための課題」『リハビリテーション医学』（46(11)、2009 年、pp. 690–696）などで、女性リハビリテーション科専門医が少ない現状をふまえた上で、体力面で男女差が出にくい職務内容や労働時間の融通の効きやすさといった点から、女性医師が働き続けることのできる職場としてのリハビリテーション科の可能性が示されている。また、同じく女性医師の割合が特に低いとされる外科においては、主として「外科医特有の時間外労働の長さ、緊急時対応の頻度の高さから、恒常的に時間を要求される育児との両立が困難である」（川瀬和美ら「日本外科学会女性外科医支援委員会によるアンケート自由記載内容の質的分析 その 1. 女性外科医の抱える問題点は何か」『日本外科学会雑誌』第 110 巻第 6 号、2009 年、p. 363）といった問題状況が共有される一方で、男性が圧倒的多数を占める中での現状打開が難しいことを指摘する内容も多かったといえる。

他方、女性医師の割合が高い診療科の研究としては、児玉知子ら「女性割合の高い診療

科(眼科・皮膚科・麻酔科)におけるキャリアパスについて』『厚生指標』(第 58 巻第 8 号、2011 年、pp. 1-7)が特筆される。同論文は、女性医師割合の高い 3 つの診療科について、1984 年と 1994 年と 2004 年の 3 時点での就業状況(継続・復職・休職・診療科変更)の動態を分析したものである。結果として、眼科・皮膚科における医師登録後 20 年の在職率の高さやそれぞれの診療科における離職ピークの時期の違いなどが示されており、女性比率が高いとはいえ、科ごとに問題状況の差があり支援方策も異なるとの結論が導かれている。

②卒後(出身大学別、病院別)

専門科ごとではなく、特定の大学の同窓生や病院内の医師全体に対して行なわれる調査研究(主としてアンケート調査)も多くみられた。全体的な傾向として、男女双方に行なわれる調査の場合、就労形態や家庭・労働に対する価値観といった質問項目を男女別で比較したものが多く²、問題状況の把握に力点が置かれているが、女性医師に限定して実施される調査の場合、結婚・出産・育児に関わるキャリアの変遷、希望する子育て支援策などを問うものが多くなっており、ロールモデルや労働環境の具体的改善策の提示に主眼が置かれていることがわかる。後者についてはたとえば、野田龍一ら「女性医師のキャリアデザイン—出産・子育てを中心に」『横浜医学』(第 62 巻、2011 年、pp. 69-74)では、アンケート調査に加えてインタビュー調査が行なわれており、「常勤」「非常勤」「転職」「ワークシェア」「退職」の観点から、先輩女性医師の具体的なキャリアのパターンが描かれている。

③卒前

卒前に特化した女性医師のキャリア研究は多くなかったが、野原理子ら「女子医学生アンケート調査によるファミリーサポートを通じたキャリア教育の可能性の検討」『東京女子医科大学雑誌』(第 83 巻第 4 号、2013 年、pp. 235-241)は、単なる女子医学生の意識調査にとどまるのではなく、養成段階における実践を通じたキャリア支援の可能性を展望している点で特筆される。同論文では、学内のファミリーサポート事業に関する学生へのアンケート調査結果をふまえ、「放課後や学童保育後の預かり」「保育所の送迎」「休日出勤や学会時の預かり」などを通じてロールモデルとなる先輩女性医師と接し、「仕事との両立」「出産」「育児」「結婚」について具体的イメージを描くことが、将来女性医師としてのキャリアを継続させる上で有効であると期待されている。

④海外

海外の研究についても多くはなかったが、米本倉基「海外における女性医師の現状」『病院』(第 72 巻第 6 号、2013 年、pp. 27-32)が興味深い視点を提示している。同論文では、日本の女性医師の実態が諸外国の医師との比較を通じて相対化されているが、特に、医師を女性が活躍できる職業とする「職業型」(チェコ・スペインなど)、医師の社会的地位が維持され男女平等で働く「社会型」(フィンランド・イギリスなど)、医師の職業も自由経済原理の中で捉える「個人型」(アメリカなど)、医師を組織人として捉える「組織型」(日本特有)といった医師の社会的地位・働き方の類型化は、日本の女性医師をめぐる現状や

課題が社会的・文化的背景によるものであることを強く考えさせるものとなっている。

(2) 事例紹介

①プログラム・事業

事例紹介としては、大学や病院での先駆的な女性医師キャリア継続支援、復職支援（ワークシェア、フレックス制、保育支援、e-ラーニング、カウンセリングなど）に関するものが多くを占めている。そうした中、関明子ら「指導的立場に立つ優れた女性医学研究者育成を目指して—保育とワークシェアによる女性医学研究者支援プロジェクト—」『日本循環器学会専門医誌』（第17巻第2号、2009年、pp. 278-283）においては、具体的支援内容に大きな独自性があるわけではないが、「役職を得て後進を育てていく女性医師が増えることで、今後の女性医師の離職率は下がり、医師数は増加して病院の収益は上がり、一医師あたりの労働量が減っていくことが期待される」（p.280）との長期的な観点から「指導的立場」に立つ女性医師支援の重要性を指摘している点が非常に興味深い。

また、瀧野敏子「働きやすい病院評価事業（ホスピレート）が進める女性医師の環境改善」『新医療』（2007年2月号、pp. 148-151）においては、女性医師を含む病院職員全体の「働きやすさ」といった観点から病院を評価しようとする事業が紹介されており、組織的な改革を促す取り組みとして注目される。

②個人の経験

女性医師のキャリア研究をめぐるのは、女性だけに焦点が当たっているものが多くを占めており、それが医師全体の問題であり、男性医師の働き方・生き方を見直すことでもあるという議論にはあまり至っていないのが現状である。このような中で、大城征「男性医師の育児休業」『病院』（第72巻6号、2013年、pp. 57-60）は、実際に育児休暇を取った男性医師の体験が綴られており、貴重な資料といえる。とはいえ、あくまで体験記であるため、今後こうした試みの限界や可能性を構造的に分析するような研究への深化が期待される。

3. まとめに代えて

以上、女性医師をめぐるキャリア研究の動向について概観してきたが、量的な面では、近年研究テーマとして関心が向けられ、まさに研究成果が増えつつある段階といえる。また、内容的な面では、興味深い論点も散見されるものの、全体として現状の把握・共有や事例紹介の域を出ない段階にあるといえる。今後、女性医師のキャリアをめぐる問題が、医師全体の働き方や業界全体のあり方、ひいては日本におけるジェンダー意識や家事・労働問題を見つめ直すものとして議論を成熟させ、具体的な施策が展開されることを期待したい。

¹ 医中誌ホームページ (<http://www.jamas.or.jp/index.html>) より (閲覧日: 2014 年 12 月 18 日)。なお、医中誌に収録されていない資料としては、採択対象分野から遠い分野の定期刊行物、海外発行の雑誌(日本の学会などにより編集されているものは可)、単行本、不定期刊行物、新聞 (MOOK は可)、海外雑誌掲載論文を紹介することが主旨の雑誌、医療従事者向けだが取材記事中心の商業誌、消費者向け商業誌、患者会誌、患者向け商業誌、病院・企業の広報誌、学会・病院などのニュースレター、医学関係記事が毎号掲載されるとは限らない雑誌、厚生労働省の研究報告、内容がレギュラー号にも掲載された学会プログラム・抄録集、データや業績などのみの定期刊行物 (業績集、年報)、学位論文 (集)、書誌情報に不備がある雑誌 (掲載論文の著者が不明確であったり、ページが記載されていないなど) が挙げられている。また、採択しない文献は、インタビュー、巻頭言、エッセイ、訪問記、施設紹介、書評、学会記事中の座長報告、海外の文献の抄録、紹介、学位論文の要旨、となっている。

² たとえば、野村恭子ら「女性医師の就労に影響を与える因子の検討」『日本公衆衛生雑誌』(第 58 巻第 6 号、2011 年、pp.433-445)、大越香江ら「勤務医のワーク・ライフ・バランスとキャリアの両立を考える—京大病院医師調査より」『日医雑誌』(第 141 巻第 3 号、2012 年、pp.585-590) など。